

TRAVEL JOURNAL

Japan's No.1 Travel Trade Magazine

2012
12/3

高齢者大国へ ようこそ

介護福祉視察客を日本に



■論文

日本のワインツーリズムに関する一考察

安田直宏(西武文理大学サービス経営学部教授)

■誌上セミナー

今日からできる120%予算達成術
グリーターが店舗の価値を高める

好評連載 ■

視座

JTB佐々木隆会長

不撓不屈のコミュニケーション
迷ったらまずは行動に移す

サイト見聞録
トラベリエ

地域の観光マネジメント
ジャパンポータルの活用

DATA ■

旅行業主要58社 9月の取扱状況

訪日介護視察旅行への提言

元気なお年寄りの街が ショーケースに

篠塚恭一

SPIあ・える俱楽部代表取締役



秦の始皇帝は、不老不死の靈薬を求めて家臣を旅に出した。2000年以上の昔、史記にある一節だ。帝の命を受けた徐福が向かったのは東方の三神山、それが命がけの旅であったことは容易に想像がつく。古今東西、不老長寿が珍重されることに変わりはない。

時を経て、今やわが国は世界一の長寿国家となつた。奇跡といわれる戦後復興を遂げ、先進国の仲間入りをした一方、超高齢者社会のトップランナーにいる。織田信長は人生50年と謡ったが、戦国時代から終戦までの500年位は人生50年社会が続いた。ところが、戦後わずか60年余りで日本人は30才以上も寿命が延びた。これがどれほど凄い話かといえば、アフリカで見つかった2万年前の古代人も紀元前後の縄文、弥生人も平均寿命は20才前というから、30年の寿命を延ばすには少なくとも数万年かかることになる。それをわずか半世紀の間に達成してしまったのだ。

少子高齢化が進むなか、外国人の訪日旅行客の誘致に期待が集まる。これまで内需を支えてきた国内旅行の需要が、人口減少で期待できなくなっているからだ。欧米から極東と呼ばれ、東洋の果てに位置する日本は、古くから神秘の国とされてきた。緑豊かで自然も美しく、繊細な和食や人情厚いおもてなしの心を持つ国として、ジパング神話は今も色あせていない。近年、アニメや音楽、ファッションにおいても国境を越えるクロスカルチャー

が進んでいる。日本の若者からは「カワイイ」という世界語が生まれるほど、日本人のライフスタイルに憧れる外国人が少なくない。インバウンド観光には、こうした他国では得られない魅力的なコンテンツが重要だろう。

今医療ツーリズムが注目されるが、超高齢者社会そのものをアピールできないか。超高齢者社会は日本の豊かさの証で、これを魅力ととらえれば高齢者も観光素材になりうる。観光が国の光を見るというなら、長寿国家の実現こそ国の光を見せることではないか。始皇帝でさえ得ることができなかつた健康長寿が日本には当たり前にある。

低負担の制度設計が参考に

日本では50年前に国民皆保険制度など優れた医療システムが導入され、国民なら誰でも衛生的で優れた医療サービスが受けられるようになった。また、栄養価の高い食料が誰でも容易に入手できる豊かな社会を築き上げた。戦後は平和な時代が訪れ、経済成長の結果、過酷な労働もなくなったことが健康寿命を支えた。一方で少子高齢化がさまざまな課題を社会に投げかけている。年金、医療、介護、多くは高齢者とのかかわりが大きい。これから約30年で日本は超高齢者社会のピークを迎えるが、経済再生とあわせて海外の専門家たちもわれわれがどうここを切り抜けるのかに高い関心を寄せている。

欧米でも認知症患者の増加は今や国家的危機との認識が広まり、英国では09年に国家認知症戦略を策定したほどだ。アジアに目を向ければ、さらに切実な状況が迫る。韓国は日本以上の速さで超高齢者社会に突入し、中国はひとりっ子政策のひずみが急速な高齢化をもたらしている。インドにもその影響が予測され、これから人口が多い国々が次々と高齢者社会へと日本を後追いしてくる。これは人口動態の変化というすでに決まった未来である。こうしたアジア諸国の中には、社会福祉という概念のない国もある。

日本の社会保障制度や優れたヘルスケアの産業モデルが手本となる可能性は大きい。かつて日本から多くの福祉視察団が欧米の自治体に出かけたが、これからは世界中から日本へやって来る。日本は欧米に学んだことで、この十数年で施設や住宅などハードの整備、改善が進み、新設されるものには福祉先進国のそれを越えた感さえある。社会保障制度の背景が違うなか、視察による学びと自らの努力でよりよいシステムができつつあり、日本のような低負担の制度設計が参考になる。

医療、介護の周辺にはさまざまな産業の芽があり、今後、経済成長のけん引役としての期待も高まる。特に介護保険制度は開始から10年余りの歳月を経て、さまざまな知見が蓄積された。福祉機器や介護ロボットに限らず、産官学が共同した多職種連携も模索され、少子高齢化がもたらす課題を地域が一体となり乗り越えようとしている。こうした日本の経験を知ることは貴重なことだろう。

単なる介護施設の見学でなく

地方では高齢化率が40%を越えて心配されるが、そこに暮らす人々は結構楽しくしていたりする。限られた予算で地方自治体は地域経営しなければならない大変な時代だが、ピンチはチャンスで発想を変えるとさまざまな可能性も見えてくる。千葉県柏市は産官学が共同して超高齢者社会に対応する街づくりに取り組んでいる。パリアフリーの住まいづくりや地域医療だけでなく、働く場、学びの場、

それを支えるICT、グリーンエネルギーの環境システム、交通アクセスなど、さまざまな最新技術を集約させた壮大な社会実験である。

こうした取り組みから住民満足度を高めなければ、これからの自治体経営は成り立たないという危機感もあり、これは高齢者社会を迎える世界共通の課題だと思う。この解決には部分的な取り組みでは持続できない。先の長寿要因にあるように生活習慣やライフスタイルそのものが健康と密接な関係があるからだ。暮らしを取り巻く自然環境や生活を支えるエネルギーの問題など、環境福祉を一体としなければ健康長寿への道は開けない。

単なる介護施設の見学や社会保障制度の勉強だけでは視察メニューが足りない。優れた医療機器など先端技術も長寿に役立っているが、福祉サービスは究極のヒューマンサービスといわれる。介護が必要となつても幸せに暮らすことができる要因がどこにあるか、どんな人的資源を必要とするのか。地域が取り組むまちづくり、人づくりそのものが視察対象で、介護が必要でも希望を持ち元気に暮らす人々が多い町そのものがショーケースだ。

地域には人の営み、生きる現実社会が存在する。それらすべてが他にない視察メニューになる。こうした取り組みに熱心な地域は少なくない。訪日観光の中で福祉視察旅行が民間外交の一翼を担えるのは関係者にとっても誇らしいことだろう。政府は観光素材にとどまらず、他国にない優れた日本の地域が持つ長所をセールスしてほしい。

受入施設の調整など細かな合意は必要かもしれないが、何とでもなる。日本の福祉システムに触れた人が帰国した時、周囲が少しでも幸せになる旅にできたら素敵だ。かつて日本人が欧米に手本を求めたように、今度は日本が世界の手本となることを地方の人にも知ってほしい。徐福が向かった海上に浮かぶ東方三神山の一つとは日本のこと、今もその跡が全国各地に残されている。



Profile

しのづか・きょういち 91年にSPIを設立し、現職就任。観光人材の育成・派遣に携わる。95年トラベルヘルパー(外出支援専門員)の養成開始、「あ・える俱楽部」の介護旅行事業に取り組む。06年NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立し理事長に就く。